様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　５ 年　５ 月 ２６ 日現在

機関番号：１２１０２
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2019～2022
課題番号：１９Ｋ１１０２７

研究課題名（和文）産後ケアを包括し3つのSを実現するエビデンスに基づく未来志向院内助産システム構築

研究課題名（英文）Building an evidence-based, future-oriented in-hospital midwifery system that encompasses postpartum care and realizes the 3 S's

研究代表者
濱田　洋実（Hamada, Hiromi）

筑波大学・医学医療系・教授

研究者番号：６０２６１７９９

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,500,000円

研究成果の概要（和文）：本研究の結果、産後ケアを包括し、3つのS、すなわち分娩に関わる女性やその家族および助産師の「Smile 笑顔、Safety 安全、Satisfaction 満足」を実現できる、科学的エビデンスに基づく未来志向の新しい院内助産システムの基礎を構築することができた。今後、この院内助産システムを3つのSの観点からさらに充実させるとともに、全国の様々な地域産科医療の現場に対応するための均てん化を行うことで、我が国の産科医療のさらなる発展が期待できる。

研究成果の学術的意義や社会的意義
　学術的意義としては、院内助産システムについて新たな科学的エビデンスが創出された点である。院内助産システムをサイエンスの側面から検証した研究は皆無に等しく、本研究で得られたエビデンスは今後の分娩管理学・助産学の発展にも大きく寄与するものである。
　社会的意義としては、研究成果が直接、我が国の産科医療の問題の解決の一助になる可能性を持つ点である。システムをさらに充実させるとともに、全国の様々な地域産科医療の現場に対応するための均てん化を行うことで、我が国の産科医療のさらなる発展が期待でき、その社会的意義は大きい。

研究成果の概要（英文）：As a result of this study, we were able to establish the basis for a new future-oriented in-hospital midwifery system based on scientific evidence that encompasses postpartum care and realizes the 3 S’s: "Smile, Safety, and Satisfaction" for women, their families, and midwives involved in childbirth. In the future, further development of obstetric care in Japan can be expected by further enhancing this in-hospital midwifery system from the viewpoint of the 3 S’s and equalizing the system to respond to various regional obstetric care sites across this country.

研究分野：産科学

キーワード：院内助産システム　産後ケア

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９（共通）

１．研究開始当初の背景

妊娠・分娩に関連して、すべての妊産褥婦と新生児に助産師中心のケアを提供する意義と重要性は明らかである。そうした中、近年我が国の周産期医療においては院内助産が非常に注目されている。その主な理由としては 2 つあげられる。ひとつは、女性としての崇高な自然の営みであり、本来病気ではない妊娠・分娩に不必要なほど過大な医療介入が行われていることへの反省である。もうひとつは、産科医不足や助産師不足を根本的原因のひとつとする、いわゆる周産期医療の危機に対する解決法としての期待である。しかしながら、現状では、院内助産はそれぞれの産科医療機関で個別の取り決めに従って行っているに過ぎず、科学的エビデンスに基づいた、すべての産科医療機関で実現可能な我が国全体の周産期医療の未来を志向したシステムは提唱されてこなかった。また、我が国の現状では、院内助産からさらに産後ケアへ切れ目なく寄り添うことができる院内助産システムは全く構築されてこなかった。

２．研究の目的

本研究の目的は、科学的エビデンスに基づいた、すべての産科医療機関で実現可能な未来志向の院内助産システムの構築である。

具体的には、まず産後ケアを包括するシステムの構築を目指した。産後ケアを視点に入れた院内助産システム研究はこれまで見当たらない。さらに本研究では、3 つの S、すなわち「Smile 笑顔、Safety 安全、Satisfaction 満足」を実現できるシステムを目指した。「Smile 笑顔」は、実際の分娩期にある女性や家族の笑顔、助産師の笑顔である。分娩という自然の営みにおいてこれら人々の笑顔が見られるためには、「安心」「相互信頼」「リラックス」等が重要であると考えられ、これらがあふれ好循環がもたらされる分娩を第一に目指すべきである。そして、そこには絶対的な「Safety 安全」がなければならない。そのためには、産科医との最小限で適切な協働もひとつの鍵であり、その視点を忘れないシステム構築が必須である。一方「Satisfaction 満足」は、分娩終了後に始まる育児にも関係した女性や家族の満足、そして助産師の満足である。前者は、単なる思い出としての満足だけではない。産褥期は精神衛生の危機ともいえる時期であり、分娩に関して不満が残った女性は特に精神的に不安定になりやすく、育児におけるトラブルも多くなる傾向があることが指摘されている。そして、ここに『産後ケアを包括すること』の大きな意義がある。一方助産師の満足は、専門職としてのやりがいを感じるとともに助産力の向上を実感し、次の助産ケアに有機的に繋がるものである。助産師個人のワーク・エンゲイジメントを向上させ、その施設の分娩対応組織をエンパワメントするような「Satisfaction 満足」の実現を目指すべきである。これら 3 つを過不足なくすべて実現する院内助産の科学的エビデンスを創出して、産後ケアも包括する新しい院内助産システムを学術的に確立していくことを目的とした。

３．研究の方法

○2019～2020 年度

2019 年度はじめに、本学附属病院でそれまでに行った院内助産(計 519 件)の患者女性・家族からの評価シートならびに臨床データ、および本院内助産システム関連研究の結果を後方視的に解析して、これを元にそれまでの院内助産体制を改訂するかたちで新しい院内助産システム(案)を策定した。そのシステム(案)に沿って、1 年間院内助産を前向きに運用した。さらに、システム(案)を 2020 年度はじめに微修正し、それに沿って 1 年間院内助産を行った。

また、産後ケアに着目した関連研究として、助産師による産後 2 週間健診の効果についてエジンバラ産後うつ病評価スケールの変化からの分析を行った。さらに、安全性の観点から高度な肥満のある妊婦は院内助産の対象外となると考えられるものの、必ずしもその基準は明確でないため、過去 5 年の当院における高度肥満妊婦の周産期転帰の解析研究を行った。

○2021～2022 年度

2021 年度はじめに、それまで 2 年間運用してきた院内助産システムの改訂案を策定した。このシステム(改訂案)に沿って、2 年間院内助産を前向きに運用した。

また、現時点での院内助産をとりまく国内の状況を知るために、全国の総合周産期母子医療センターおよび大学病院(本院)を対象にアンケート調査研究を行った。加えて、産後 2 週間健診を受診する褥婦の傾向とそうした褥婦への助産ケアについて関連研究を行った。

４．研究成果

○2019～2020 年度

2 年間に計 251 例の患者で本システム(案)による院内助産が行われ、うち 236 例が正常経腟分娩だった。残りの 15 例では、分娩停止や胎児機能不全などの医学的適応により、医師による吸引・鉗子遂娩術（12 例）もしくは帝王切開術（3 例）が施行されたものの、これらの 15 例を含めて全例で母児に大きな分娩合併症はなかった。

一方、関連研究の結果、助産師による産後 2 週間健診は妊産婦の精神症状に対して速やかに介入できるという点で有用であることが明らかとなった。また、非妊時 BMI が 35 以上の女性においても 83.0%で経腟分娩が可能であるものの、全体の 44.3%で何らかの医学的適応により分娩誘発が必要であり、院内助産の対象とするには肥満度だけではない、さらなる対象基準の細分化が必要であることが明らかとなった。

○2021～2022 年度

2 年間の院内助産数は計 191 例であった。この間、分娩停止や胎児機能不全などの医学的適応により医師による帝王切開が施行された症例は 2 例、鉗子遂娩術が 3 例のみだった。こうした医師による医学的介入率は、本研究の前半 2 年間の 6.0%から後半 2 年間では 2.6%とほぼ半減していた。これはシステム改訂の効果と考えられた。全例において、前半 2 年間と同様に母児に大きな分娩合併症はなく、策定したシステム(改訂案)の「Safety 安全」は担保できていると考えられた。患者女性・ 家族からの評価も前半 2 年間と同様に良好であり、「Smile 笑顔」と「Satisfaction 満足」が得られていた。

全国対象のアンケート調査研究の結果では、院内助産実施施設の割合(20.9→29.7%)、「院内助産は地域の産科医療提供体制の一部として有用で、積極的に取り入れるべきである」と回答した施設の割合(41.9→48.6%)は、ともに過去（2017 年）の我々の調査結果より増加していた。我が国の地域産科医療における、院内助産の重要性がさらに認識されてきていることが明らかとなった。加えて、産後 2 週間健診を受診する褥婦の傾向とそうした褥婦への助産ケアについての研究の結果、産後 2 週間健診が育児不安を抱える褥婦の支援の場となることを明らかにした。

○成果のまとめ

4 年間の研究の結果、産後ケアを包括し、3 つの S、すなわち分娩に関わる女性やその家族および助産師の「Smile 笑顔、Safety 安全、Satisfaction 満足」を実現できる、科学的エビデンスに基づく未来志向の新しい院内助産システムの基礎を構築することができた。今後、この院内助産システムを 3 つの S の観点からさらに充実させるとともに、全国の様々な地域産科医療の現場に対応するための均てん化を行うことで、我が国の産科医療のさらなる発展が期待できる。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計0件

〔学会発表〕　計3件（うち招待講演　0件／うち国際学会　0件）

１．発表者名 安宅和佳奈，池田歩美，寺澤瑛利子，中嶋真弓，白根みゆき，根本清貴，小畠真奈，濱田洋実
２．発表標題 産後2週間健診を受診する褥婦の傾向と助産ケアの方向性について
３．学会等名 第17回日本周産期メンタルヘルス学会学術集会
４．発表年 2021年

１．発表者名 伊東慶彦，眞弓みゆき，池田佳織，堤　春香，足立結華，西田恵子，阿部春奈，大原玲奈，小畠真奈，濱田洋実，佐藤豊実
２．発表標題 高度肥満妊婦における周産期転帰の検討
３．学会等名 第73回日本産科婦人科学会学術講演会
４．発表年 2021年

１．発表者名 名倉弓子，松尾亜有美，石塚早織，白根みゆき，楠見由里子，根本清貴，小畠真奈，濱田洋実
２．発表標題 助産師による産後2週間健診の効果 -エジンバラ産後うつ病評価スケールの変化からの分析-
３．学会等名 第16回日本周産期メンタルヘルス学会学術集会
４．発表年 2019年

〔図書〕　計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究分担者	小畠　真奈 (Obata-Yasuoka Mana) (20420086)	筑波大学・医学医療系・准教授 (12102)	

６．研究組織（つづき）

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究分担者	大原　玲奈 (Ohara Rena) (90725772)	筑波大学・医学医療系・講師 (12102)	

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関